

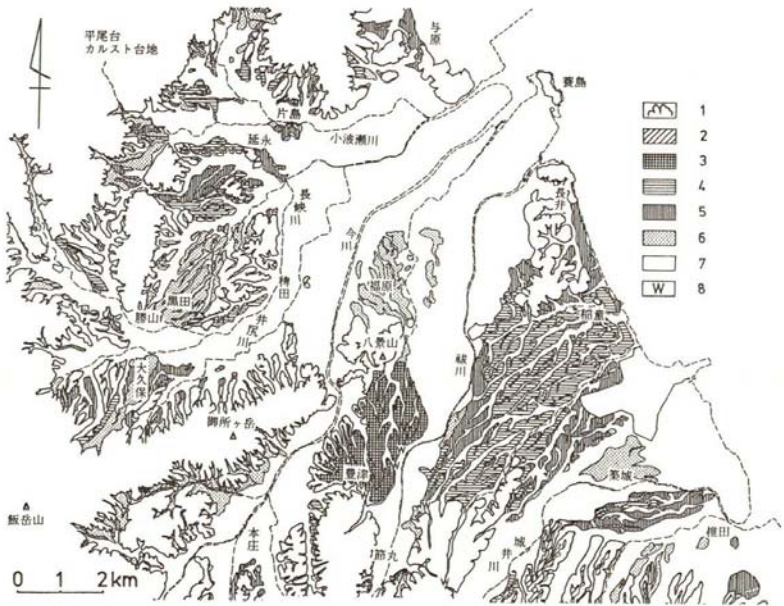
紀火山岩類からなる英彦山・犬ヶ岳山塊を水源とする。このうち今川は流域の大部分が古期岩類地域にあり、また中流部の赤村油須原で遠賀川水系・御み被川の上流を争奪し（波多江、一九七七）、また犀川の盆地を持つことから、むしろ古期岩類地域の水系とみなせる。これは平野部に入ってから河川勾配（長峽川〇・一四度、今川〇・一八度、祓川〇・四二度、城井川〇・四九度）にも現れている。すなわち長峽川・今川両水系は緩やかな勾配を持ち、また今川は中流部に盆地を持つため、より下流への粗粒物質の運搬が少なく、逆に祓川・城井川は英彦山・犬ヶ岳山塊から途中に著しい盆地部を持たないまま急勾配で流下するため、粗粒物質を直接周防灘まで運搬していると思われる。

## 二 行橋平野の台地

行橋平野の台地は海成段丘と河成段丘からなり、平野の北部と南部で性質を異にするが、それは後背山地の地質に負うところが大きい。ここでは、段丘面を高位から高位段丘（H1）、高位段丘（H2）、中段段丘（M1）、中段段丘（M2）、低位段丘（L）の各面に区分した（第4図）（千田、一九八四）。

### (1) 高位段丘（H1）面

行橋平野南部に分布する最高位の段丘面で、更に南方の中津・宇佐平野では広くみられる。本段丘面は英彦山・犬ヶ岳山塊を取り巻くように分布することから、耶馬溪層および筑紫熔岩からなる山地の開析によって山麓に形成された最初の段階の扇状地と考えられるが、その後の浸食により丘陵状の地形を呈する。



- 1 山地・丘陵地 2 H1面 3 H2面 4 M1面 5 M2面 6 L面  
7 沖積面 8 風隙

第4図 行橋平野の地形分類図 (千田 1984)

H1面を構成する堆積物は最大径八〇センチ、平均径一〇〜二〇センチの分級のよくない安山岩円礫からなる礫層を主とする。砂層をレンズ状に挟み、また花崗岩礫も含む。この砂礫層は一〇センチ前後の厚さを持つが、全体が完全にクサリ礫となっており、赤色化も著しく、TERRAの色調を示す礫も多い。

(2) 高位段丘 (H2) 面

今川と祓川に挟まれた豊津付近に分布する段丘面で、扇状地として形成され、飯岳地塊列以北にはほとんどみられない。本段丘面は、北および北西方向へ〇・八八度の勾配で傾くが、上流側にあたる南部には風隙の地形が幾つかみられる。また、祓川の上流域にはこの扇状地に相当する河成段丘面が点

在する。今川流域にはH<sub>2</sub>面はみられない。H<sub>2</sub>面については、次節の豊津町の地形でも述べる。

(3) 中位段丘(M<sub>1</sub>)面

M<sub>1</sub>面の分布形態は飯岳地塊列を挟み、その南北で異なる。北部では海成段丘、南部では扇状地として形成されたような形態を示す。

北部のM<sub>1</sub>面はごく山麓部を除き非常に平坦な段丘面で、海拔一六〇〜三〇〇メートルの高度に発達する。段丘面高は荻田町谷で二二・五メートル、徳永で二六・五メートル、延永で二七・八メートル、鳥井原で二七・四メートル、勝山町黒田で三〇メートル、稗田で三〇・九メートルを示し北から南へわずかに高度を上げる。また、荻田町片島では、一六メートルの高度で、M<sub>1</sub>面は山麓から海方へ向かって緩く傾く。

堆積物は、谷では下部三メートルが赤色化(2.5YR5/8)した花崗岩質砂・シルト層であり、海岸付近の堆積物を思わせる。その上部は火山灰層で、下位から五センチメートル厚のラピリ、一〇〜二〇センチメートル厚の白色軽石質粘土、五〇センチメートル厚の球殻体集積部、一五〇センチメートル厚の暗橙褐色軽石質火山灰、二〇センチメートル厚の腐植土となっている。この火山灰層は八女粘土層や宇部火山灰層の特徴と同じで、恐らくWatanabe(一九七八)の阿蘇4火砕流のうち八女軽石流と鳥栖オレンジ軽石流に対比されよう。延永では基盤の風化花崗岩上にのる二〜六センチメートルの厚さの砂礫層がみられる。稗田でも同様の砂礫層がある。いずれも礫は直径二〜三センチメートルの分級のよい変成岩や石英の礫で、変成岩礫はクサリ礫化している。また赤色化も著しく、2.5YR4/8〜10R4/8を示す。これらの砂礫層は全体として海岸付近で堆積したもののようである。

南部のM<sub>1</sub>面は祇川右岸の豊津町綾野付近から北東方向に稲童まで広がる開析扇状地面で、高度六〇メートルか

ら一・二メートルまで〇・四一度で傾き下がる。高位扇状地面のH2面に比べると緩やかである。

行橋平野南部のM1面についても、次節の豊津町の地形で詳述する。

#### (4) 中位段丘(M2)面

本面はより高位の段丘面を取り巻くように平野全域に分布する。北部では主として海成段丘、南部では扇状地の形態をとる。高度は海成段丘の部分では八〇―一五メートルで、非常に平坦である。それは苅田町与原、片島、延永、下崎、長井などに典型的にみられ、特に与原、長井のM2面は砂州として形成されたようである。祓川沿いではM2面はM1面の浸食面としてみられるが、飯岳山―御所ヶ岳北麓の勝山町大久保を中心とする地域や城井川沿いでは扇状地として分布する。今川沿いでは犀川町本庄にみられるが、本流沿いにはない。

飯岳地塊列以北の平野北部では一・二メートルの厚さで火山灰がみられ、南部ではそれが不明瞭である。大久保では最大径一〇センチメートル、平均径五―一〇センチメートルの変成岩・花崗岩亜円礫からなる礫層上に一七〇センチメートルの厚さで火山灰がのる。それは下位から二〇センチメートル厚のラピリ層、五〇センチメートル厚の白色粘土質火山灰層、一〇〇センチメートル厚で下部に一―二センチメートルの球殻体を持つ橙褐色軽石質火山灰層で、M1面にみられる火山灰層と全く同じである。すなわち阿蘇4火砕流はM2面までのついでいる。

一方南部ではM1面と同様に火砕流堆積物は分布しない。長井では最上部二〇センチメートルの腐植層の下に四五センチメートルの厚さで上部にクラックを持つ砂質ローム層がある。その下位は粗砂―中砂である。この砂質ローム層は阿蘇4火砕流に伴う降下火山灰と考えられる。同様なローム層は稲童や椎田でもみられ、M2面までの段丘面は、七・五万年前以前に形成されたと考えることができる。

(5) 低位段丘（L）面

L面は行橋平野で最低位の段丘面で、主に扇状地の形態をとる。黒田の長峡川の旧流路による扇状地、祓川左岸の福原を中心とする扇状地、今川左岸の飯岳山東麓から流下する支流の作った小扇状地、城井川左岸の築城市街地ののる扇状地などである。このうち長峡川については現在の長峡川の流路とは異なり、勝山から北東方向に、花崗岩からなる山地の間を流れていた流路跡がL面をなし、その傾きは〇・三四度である。すなわち河川争奪により形成された面がL面で、勝山では現在の長峡川との間に比高二―三メートルの崖があり、風隙の地形も残っている。この面の下流側は沖積面下に埋没する。また福原の扇状地も先端部が沖積面下に没し、その連続は沖積面下に追跡できる。

堆積物は福原では最大径二〇センチ、平均径五センチの扇状地礫層である。この段丘面には阿蘇4火砕流に關係する火山灰層はみられないことから、七・五万年以降に形成された面をすべて含んでいる可能性がある。

三 行橋平野の低地

低地は飯岳地塊列以北の行橋平野北部（行橋盆地）によく発達する。しかしながら、今川を境にしてその性格を異にし、分布高度にも違いがみられる。今川左岸以北の長峡川・小波瀬川流域では海拔五メートル以下の地域がおよそ五メートル内陸まで続き、海拔一〇メートル以下の地域も七―八メートル内陸まで広がる。これに対して今川右岸の祓川流域では、河口からおよそ一・五メートルで海拔五メートル、三メートルで一〇メートルの高度になる。長峡川・